

國學院大學學術情報リポジトリ

近世後期江戸近郊農村地域文化の展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 和子, Ota, Kazuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002482

「近世後期江戸近郊農村地域文化の展開」

太田 和子

論文要約

序章

従来の近世史研究では、政治史や社会経済史が中心であり、文化史については公家や武家などの支配者層が担う文化の研究が主体であった。また、町人層についても同様に京・大坂・江戸など都市部の富裕な町人層の文化活動が研究対象とされ、地方に居住する庶民が携わった文化活動については、要素が強く、芸術性に乏しいと考えられ、顧みられなかった。近年研究成果の蓄積がなされつつあり、先行研究では、地域文化自体を分析すると、従来から研究対象となっていた俳諧や医学、研究が乏しい和歌・漢学・狂歌・国学・插花・書画など多種多様な文化に携わっていた庶民が確認できる。さらに地域文化には階層性があることを示した研究では、階層とは教養や知識の必要性が大きいものを上層と位置付け、和歌・漢学・国学・狂歌などを指し、下層は季語などの一定の決まり事を修得すれば楽しめる俳諧を指す。また担い手の多くは村役人や僧侶・神官、在地の商人などであり、文化の広がりを示す風雅圏と、経済活動の繋がりを示す経済圏の重なりが見え、地域文化は単独の文化活動だけで成り立つものではないことが示された。数代にわたって文化に関わることで、蔵書の蓄積や、寺子屋の開設に結び付くなど、知識や教育の面において地域貢献が行われた事例も示され、村内に名主主導の俳諧結社が組織され、幕末になるとその組織に政治性が加味されたことが明らかにされている。このような蓄積により、研究が行き届いていなかった農村部でも多くの人々が文化活動に携わっていた事例が示された。

また地方を研究対象とするのに欠かさないのが自治体史である。地域顕彰を目的とした自治体史編纂は、狭い範囲で活躍した地域の文化人であつても、その業績を紹介している。近世中期になると都市部の文化活動が支配者層や富裕な町人層から下級武士や町人の中から文化活動を行う者が現れてきた。この風潮は地方へ波及し、教育や教養、経済活動などの影響を受け、地域社会が政治・経済・文化の結節点となり、地域文化の活動を農民の社会生活の一端と捉え、活動内容などの実態を検証し農民生活の多様性を明らかにすることを目的とした。

第一章 江戸近郊農村地域文化人の蔵書

農民の文化活動の一端を三代にわたり医業に従事した武蔵国多摩郡本宿村字小野宮（現東京都府中市内）の内藤治右衛門家の人々の蔵書のうち医書を分析対象として、医術修得過程や活動内容などを明らかにし、知の蓄積を解明することを目的とした。

第一節では内藤家の歴代の業績を紹介し、特に内藤家が医術を家業とするきっかけとなった三代目は、他家の出身であるが、江戸で幕府奥医師の許で修業し、退塾後治右衛門家の本家に寄宿し、村内で医者として活動し、婿となったという経歴の持ち主である。四代目はその息子で父から医術を学び跡を継いだ。五代目は医術を継がず、六代目が祖父から医術を学んだのである。

医術のほかには寺子屋も開いていたという言い伝えもあり、時期・寺子の名前・居住地などの記録も残っており、近隣村の寺子屋との比較検討をしたが、教育内容・在籍年数など不明なため、具体的な分析はできなかったが、享和二年（1802）から天保七年（1836）までの三五年間のほぼ毎日の記録を見ると四代目が「孟子」の講釈を行ったことなどが見えた。

第二節では蔵書のうち「医書」の分析を行うために、初めに近世医学の発達について概観した。

治右衛門家は寛政一〇年（1798）に家屋が焼失し、三代目以前の蔵書はほぼ残っていない。

内藤家には四代・五代・六代の蔵書目録があり、その中から四代と六代の「医書」について分析を行った。

四代目重喬が父から医術を授けられた時期の日本の医学は、唐以前の医学に依拠する古医方が主流となっており、蔵書目録中八〇%以上が、中国の原典・日本人の翻訳・解説書及び漢方医の著作である和漢医書であった。まだ西洋医学の認知があまりなされていない時期で西洋医学書は三%余である。

次に書籍の入手法のうち購入について年月日不詳であるが、書名・金額が記載してある史料があり、分析した結果、医書は五部（九・四%）、経史子集一二部（二二・六%）、国史雑書記録一三部（二四・五%）、歌書日記物語類一四部（二六・四%）、墨帖一部（一・九%）、軍書二部（三・八%）、俳諧歌二部（三・八%）、瓶花書二部（三・八%）、絵図二枚（三・八%）であった。

医書は家業用、経史子詩文雑書類・国史雑書類・歌書日記物語・軍書・絵図は学問教養、墨帖は教養と寺子屋用であろうか、俳諧歌・瓶花書は趣味とそれぞれの使用目的を考えると、近世の文化的活動は学問教養であり趣味であったことが指摘できる。

第三節では、六代目重鎮の医書について分析した。

重鎮の蔵書目録には重喬の蔵書も含まれているが、重鎮自身が書写した医書も多く含まれている。医書に限ると重鎮分が二六四部、重喬分が一七七部であるから一四九%の増である。医書の分野別は和漢書二〇三部、西洋医書二八部、本草書五部、重鎮著作一部、不明二七部である。特徴的なのは重喬の蔵書では和漢医書が一四三部であったが、重鎮の蔵書では二〇三部一四一%の増。西洋医書は七部が二八部と四〇〇%増加している。

版本と写本については、版本が四六部（一七・四%）、写本一四八部（五六・一%）、重鎮著作一部（〇・四%）、不明六九部（二六・一%）となる。重喬蔵書と比較すると不明の割合が増加しほかは減少している。この増減の理由はわからない。

写本の奥書には写本した年月日、写本の経緯などが記されている。この奥書を読むと重鎮は文政六年（1823）初夏に初めて書写し始め、同年中に二部写本を完成させている。

その後毎年複数部写本を作成し、嘉永元年（1848）までに九〇部仕上げている。一年平均約三・五冊である。

購入書籍については重鎮も重喬と同じように史料を残し、購入した年月を記録している。購入は絵図も含めて八九部。医書が七七部（八六・六％）、経史二部（二・二％）、国史五部（五・六％）、歌書一部（一・一％）、墨帖三部（三・四％）、絵図一部（一・一％）である。重鎮の熱意が医術に向かっているのがわかる。

医術の発達に伴い収集する医書の内容が医術の基本とされた中国医書から国内医師の著作へ移り、さらに西洋医学書を取込むように変化したことが分かった。

医術の修得には医書の購入・書写という方法が大きな役割を果たしていたことが再確認され、各代それぞれが医学の発達に即した蔵書の収集を行っており、そうした判断ができるだけの知力を備えていた。

第二章 近世後期多摩川流域の狂歌人

近世後期の江戸近郊農村における地域文化の研究は主に俳諧を対象として行われ、連の結成や、村内での組織的活動などが明らかにされてきたが、本章では、研究対象地である東京都多摩地域で狂歌に携わった人々の実態を明らかにし、江戸近郊農村における地域文化の多様性と、地域性が文化活動にどのような影響を与えたかを検討した。

狂歌は俳諧より歴史は浅いが、天明期（一七八一―一八八）に爆発的人気で一世を風靡した。牽引したのは武士と町人で、狂歌は漢文や古典の知識と風刺を混ぜ合わせた遊びであった。研究分野では天明期を象徴として「天明狂歌」と呼び、それ以降の狂歌は低調である。評価され研究対象から外されていった。その風潮は自治体史においても同様で、多摩地域で狂歌の項目を設けているのはわずかに『多摩市史 資料編二』と『府中市教育史 通史編 上』だけである。

しかし、近年は低調期と考えられていた文政期こそ狂歌が日本各地に広がり、狂歌の愛好者が増えた時期であったと認識されている。文政期の狂歌が隆盛になった要因の一つが、幕府の下級武士である代官所の手付が日本各地の幕府天領を異動して自身の趣味である狂

歌を地方に広めたこと。もう一つは鹿都部真顔（北川真顔。四方真顔）が、天明狂歌の特徴である社会・政治の風刺から離れて、「俳諧歌」と名付け、歌集の装丁や歌題を古典調としたことにより、地方で多くの人々に受け入れられたことである。

第一節では武蔵国多摩郡本宿村小野宮の内藤重喬の活動のうち、まず俳諧活動について内藤治右衛門家史料「玉川南北雅名録」に記録されている重喬と同時代に活動していた俳人二二六名、判者の部一六名、天保期一名合計二五五名の居住地から現在の行政域を示し、その地域的特徴を明らかにした。

大きな集団としては府中市内、八王子市内が特筆すべき地域であること、この二地域は五街道の一つ甲州道中の宿場である。そのほか交通の便が良い宿場や街道沿い、近世後期から活発になった養蚕・絹織物業などが盛んに行われていた地域、内藤家との血縁・地縁があると考えられる地域などである。重喬の地縁・血縁や交流範囲だけでなく、経済活動によって広く地域を結びつける可能性があることを明らかにした。

第二節では、重喬を狂歌の分野から検証し、狂歌が在村文化としてどのような多摩地域に広がっていたのかを明らかにする。

重喬は天明（一七八一―一八八）のころに酔竹園橘洲（唐衣橘洲）に入門し、天明期の狂歌を久練堂橘良（また馬の橘良）と名乗り活動した。のちに狂歌堂北川真顔の社（四方側）に属し、化政期の狂歌界を牽引した四方真顔の門人として息子の重英と共に活動し世に知られるようになった。

多摩地域で狂歌を嗜んだ人々が何人いたのかは全く不明であった。人数把握より存在についてほとんど知られていなかった。八王子千人同心で漢詩人である川本衡山が、安政三年（1856）に著した『雑花恠石集』の中に狂歌（句）分野は四人しかいない。

まず武蔵国多摩郡の狂歌人を把握するために『江戸狂歌本選集』（江戸狂歌本選集刊行会編東京堂出版 二〇〇七年）全一五巻から武蔵国多摩郡内居住とわかる狂名を拾うと、五九名確認できた。行政域別に示すと青梅市内が三七名（六二・七％）、八王子市内が一三名（二二％）、日の出町内が三名（五・一％）、府中市内が二名（三・四％）、多摩市内が二名

（三・四％）、調布市内が一名（一・七％）である。以上の人びとの活躍時期は主に文化・文政期である。

その中で四方側の指導者的立場である人物は、青梅に四方側異郷判者一名、重喬も異郷判者。息子の重英は異郷都講という判者に次ぐ地位にいた。多摩地区の狂歌はこの三人により牽引されたが、江戸から四方側主催者の四方真顔が江戸在住の判者と共に重喬の許を訪れることもあり、師や他の門人との交流が重喬の地元で行われていることが明らかになっている。

江戸近郊農村は古代・中世からの名勝地や史跡が散在し、地域文化人が俳諧や狂歌で活躍すること、江戸にも名が知られ、江戸在住の文化人が訪れ紀行文などを創作すること、江戸庶民の遊覧を誘う役目も果たすようになった。

第三節では、内藤家の狂歌について父重喬の陰に隠れて評価が低い重英の狂歌について述べた。重英は医師を受け継がず家業を継いだ。しかし、狂歌での活躍は父同様であり、刊行年不明であるが、森羅万象ほか撰「俳諧歌春雨双紙」に小野宮 斧金厚（重英）の絵姿が載せられている。

天保期に入ると、四方真顔亡き後四方派を引き継いだ森羅亭万象との関係を確認でき、俳諧歌の世界で重英が大いに活躍していることを検証した。

俳諧も狂歌も多く、参加者がいるのは八王子や府中のように、街道沿いの宿場町でありそこは人が行きかう、また経済圏を持つているような場所がその周辺地域にまで広がる文化圏を持つて条件であることを確認した。

第三章 武蔵総社神主家の政治情報

甲州道中府中宿の武蔵総社六所宮の神主家である猿渡家は、幕府から朱印地五百石を与えられ、神事・神職組織・社領管理などにおいて多種の交流を持っていた。本章では直接文化活動ではないが、社会情勢や政治情勢への関心の在り方について明らかにすること、地域の核である神社の神主家の交流の性格や実態を明らかにし、地域の文化活動との関わりを検証することを目的とする。

江戸後期から幕末まで猿渡家が二代にわたって政治・社会情勢を書留めた「反古帖」の内容、情報入手などを分析した。

六所宮は天正一九年（一五九一）徳川家康から朱印地を与えられ、家康が日光へ改葬される際、霊柩が府中宿に一夜とどまった由緒から、元和四年（一六一八）境内に東照宮が造営された。神主家は毎年正月六日江戸城へ登城し将軍へ拝賀独礼を行う。神職は神主、禰宜。社家は四家。社僧は惣行寺、円福寺、明王院、安楽寺、妙法寺、花光院、泉蔵寺の七寺。ほかに社人がいる。明治元年（一八六八）神仏分離を実施、同四年大國魂神社と改称した。

第一節は、六所宮神主家猿渡家史料「反古帖」の概要を示した。「反古帖」は現在東京都府中市郷土の森博物館に寄託されている古文書四一冊である。表紙に貼付された題箋に「反古帖」の文字とその下に一から四十一までの数字が書かれている。題箋の筆跡は同一人物と思われる、書型、装丁から短時間に整理されたとみられる。

書誌的概要は、書型縦約二三cm、横約一六cm。丁数は最少二八丁から最多六七丁。そのうち「反古帖 二十」は白紙が三二丁綴じられている。記録されている情報は延宝三年（一六七五）から慶応四年（一八六八）までの一九三年間、三五年分と年不詳分である。四一冊のうち八割強の三六冊に幕末の情報が記録されている。記録された情報の内容、収集時期、入手先などの分析を行った。

情報収集は、主に一〇代目神主猿渡近江守盛章とその息子一代目猿渡容盛である。盛章は寛政二年（一七九〇）猿渡盛房の長子に生まれる。幼名伊折之助、盛栄、のち盛章と改める。能登、近江と称した。文化元年（一八〇四）一五歳で新神主に就任、同七年父のあとを継ぎ神主に就任。同一〇年儒学者萩原楽亭、国学者高田正次郎（のちの小山田与清）に入門。文政九年（一八二六）従五位下近江守に叙任。武蔵国内の一宮から六宮の考証などを行った。また樅園と号し歌壇を形成した。嘉永六年「異国船渡来之儀ニ付奉申上覚（下策儀案）」を幕府へ上申。文久二年（一八六二）神主職を容盛へ譲り、翌三年七三歳で没す。

容盛は文化八年（一八一）盛章の長子に生まれる。幼名伊折之助、のち豊後、左衛門、無位と称した。文政八年一五歳で新神主に就任。天保六年（一八三五）父と同じく小山田与清に入門した。安政五年（一八五八）同門の西野新治を介して徳川斉昭の下間により建白書を上程する。文久二年父のあとを継ぎ神主に就任。父から樺園歌壇を引継ぎ慶応二年（一八六六）から歌集「類題新竹集」、『類題新竹集』府中市教育委員会一九八六年の編集を始める。明治二年神主職を息子盛愛に譲り明治政府へ出仕、同一二年全ての官職を辞し、同一七年七三歳で没す。

反古帖に記録された情報の年代で一番古いものは、「反古帖 二」の延宝三年「慈眼大師三十三回忌追善三十首短冊之和歌」である。一番新しいものは「反古帖 四」の慶応四年東征軍の沙汰・申達と上申である。

情報量が多く、分類を「大分類」「中分類」「小分類」とし、「大分類」は幕府関係・朝廷関係・東征軍・猿渡家・その他とした。

収集された情報は、近世前期・中期の記録には、家職を意識してか、神社に関するものや歌会に関するもの、後期には対外問題に関するものが多く、幕末・維新时期には諸外国との交渉や尊王攘夷運動、幕政改革などの政治・社会情勢に関わる情報が多く、総数一二九五件に及び、多数収集された年代は文久年間、安政年間、嘉永年間であった。

第二節は、情報の入手先である。

情報提供者は二〇名、関係の内訳は縁戚、地域文化人、六所宮関係、縁故、友人、旅先での同宿、不明である。猿渡父子が収集した政治情報の大半は縁戚や地域文化人、また寺社奉行所の役人などを通じて入手したものである。情報は人間関係によつて、つまり人的ネットワークにより伝達されていたことが判明した。

第三節は猿渡家が情報の発信元となった事例であるが、一例しか見つからなかった。情報源は甲州道中筋で開業していた医者、門人が、桜田門外の変の第一報を猿渡家から入手し、師へ報告している。この医家では複数の門人が代診を行っており、患者宅で同じく桜田門外の変の後報を聞き、別の村で坂下門外の変についても聞いている。猿渡家からの情報提

供についてみてきたが、猿渡家にとって幕府の人事や制度の改正を知ることとは家を守るために必要なことである。しかし、地域では猿渡家のように幕府内部の情報を集めなくてはならないような事は、極めて僅かなのである。猿渡家と交流がある周囲の家々は詳細な政治情報を必要とはせず、相互に情報を共有する必要もなかった。近世社会において情報は開示されるものではなく、統制されるものであると考えられてきたが、猿渡家が入手した情報は、幕臣、陪臣である縁戚や縁故などの武士階級からもたらされたものが多い。猿渡家は武士階級に繋がる家と考えられていた、杵組みの中であれば統制は必要とは考えられなかった。社内紛争や自家の権威保持のために幕府の触、特に神社が関わる事項についての情報は必須で、収集先は縁戚である御家人や大名家の家臣などほとんどが武士身分であった。神主が必要とした情報は、五百石の朱印地を安堵された神社の権威と自家の安泰を守ることを意図したものであり、情報は必要とする者が、必要とする物を集めるものである。第四章 武相両国の歌人たち

まず、修得するため、時間を費やすため携わる人が少ない。特に和歌は交流範囲が広く、一国単位にとどまらず、二、三カ国に及ぶこともあった。一方で小さな集団が作られ地方歌壇を形成していたという指摘がある。近世後期には全国から歌を募った『類題集』と冠する歌集が出版されていることなどから、和歌が地方に根付いていたと考えられ、歌人の交流範囲の広さと地方歌壇の実態を明らかにすることを目的とした。『第一節では、六所宮神主家が編集した和歌集「類題新竹集」を分析し、掲載されている武蔵国・相模国の歌人たちの歌数・居住地や業績などから、交流範囲の広さを明らかにした。歌人の分布は武蔵国で一、二カ村、相模国三七カ村、両国以外九地域で、ほとんどが宿

場町・城下町などの町場である。歌人は町場にいる師匠を核として周辺地域へ広がり増加した。

第一節では、慶応二年（一八六六）に『類題新竹集』を編纂した武蔵総社六所宮の猿渡容盛の事績を紹介した。

第二節では、新竹集に先行する和歌山の加納諸平編『類題鰻玉集』、和歌山の長澤伴雄編『類題和歌鴨川集』、伊勢の佐々木広綱編『類題千船集』へ投稿した武蔵国・相模国の歌人を抽出した。

相模国の歌人が『鰻玉集』へ最初に投稿したのは文政十一年（1828）、『鴨川集』は嘉永三年（一八五〇）、『千船集』は元治元年（1864）である。武蔵国は『鰻玉集』が天保七年（1836）、『鴨川集』は嘉永二年、『千船集』は安政五年からであり、歌人の延べ人数は相模国が一八八人、武蔵国は九七人で、相模国が一〇年早かったが、延べ人数では武蔵国が圧倒的に多かった。

この三類題集に投稿した歌人のうち相模国戸塚宿の鈴木長温は国学者加藤千蔭の姻戚であり、多くの国学者や歌人と交流があった。相模国大槻村の原久胤は歌人である。武蔵国保土ヶ谷宿の山平伴鹿は和歌を教えていた。忍の黒澤翁満は忍藩の用人であるこれらの人物が地方歌壇の主宰者であろう。

第三節では『類題新竹集』について分析した。

江戸の歌人は多数に上るということで不掲載としている。収載歌人は相模国武蔵国合わせて五〇五人と遊客一〇人、和歌合計二七三七首である。歌人の居住地の多くは古代中世からの由緒を持つ神社・寺院や城跡などが存在している。まさに国学・和歌の舞台であった。また歌人の身分は神職・僧侶・武士・宿町村役人・学者・商人などが半数、不明が半数であった。幕末には掲載歌人の半数を身分不詳つまり庶民が占めていたことを明らかにした。

第四節では、猿渡家と相模・武蔵国の歌人について分析した。歌人の中でも神職、国学者、府中宿及び周辺地域など猿渡家と所縁ある人びとを中心と

して、先行の三類題集のように募集という形はとっていないのが特徴である。編集者である猿渡容盛の父は文化末年地方歌壇の主催者となり、和歌は嘉永・安政期には周辺地域にも広がっていた。また歌人のおそく半数は知識階級とはいえない。知識階級とは言い難い庶民層であるが、武蔵国の場合歌人の居住地の多くは、古代中世からの由緒を持つ神社・寺院や城跡などが存在し、まさに国学・和歌の舞台である。知識階級ではない階層の歌人たちもこのした歴史環境を認識し、和歌に親しんでいたのである。

第五章 地域文化人の明治

幕末維新期に地域文化人としての基礎を築いた本多雖軒の一生を明治の新制度や社会の中でどのような文化活動や社会活動を行ったのかをみることに、近代社会で近世社会が果たした役割について考察することを目的とする。

第一節は、地域文化人としての雖軒を見るため、雖軒の活動を一〇年余におよんだ修業時代について、当時の医学修得法や、長崎遊歴での体験などを通して、自己の到達点を図り、目標に出会い、多くの刺激を受け勉学に励み、師の代診を行うことで実践経験を積んだことを明らかにした。

第二節は独立以後の開業と帰郷時における不安定な生活状況の中でも地域文化人として行動する姿を確認した。

第三節は明治政府の医学や教育の新制度に直面し、向き合い、自分の場を確保する姿を検証した。

第四節は変容する社会の中で地域文化人として活発に活動した晩年までを述べた。幕末に、医学・漢詩文・書・画を近隣村の医師のもとに弟子入りし、修得した在村医が明治になり、国が西洋文化を取り入れたことで旧来の制度が否定され、その影響を受けながら教師・医師として過ごし、晩年は書・画を求められるなど常に近世社会で身に付けた基盤を見失う事なく過ごし停滞ではなく、継続しつつ変化に対応し変化を自分の物として一生を過ごした。近世社会が近代の基礎となったことを示すことができた。

終章

地域文化の活動を農民の社会生活の一端と捉え、地域文化には多くの種類があり、文化活動は教育や教養、経済活動などの影響を受け、さらに地域性も重要な要因となりうる。考え、江戸近郊農村に居住した人びとの地域文化活動を実証し、その実態と活動内容を検討し、農民の生活の多様性を明らかにする。俳諧や狂歌、絵画、漢詩文、国文学などそれぞれの趣味嗜好により、文字の修得であったこと。俳諧や狂歌、絵画、漢詩文、く経済活動などの影響も受けながら、個々人の活動により地域文化人となり得たことを確認した。

地域文化の世界では、時には階級・身分の差なく楽しみを共有することもあった。また支配する者とされる者という対立関係を回避する知恵を生み出した近世社会の成熟と、自らを近世社会で獲得した基盤の上に置き続けることで、近代社会を支えることができたのは、幕末期の地域文化を含めた社会の変化が要因である。